

3.11 後を生きる

思うに、希望とは

斎藤貢



さいとう みつぐ 1954年、福島県生まれ。詩集に『蜜月前後』『モルダウから山振まで』『竜宮岬』。詩誌「白亜紀」「歷程」所屬。3・11は福島県南相馬市で被災。

この地上の、楽園で生きる。

未来がすでに、断たれていたとしても。

希望とは、思うに任せない未来への

苛立ちいらだち、と。

あきらめ、と。

絶望、と。

地震に。津波に。放射線に。

地上の楽園を追われて

もはや、ここには誰も戻れなくなった。

ここには、ひかりが、届かない。

ことばが、ひとや土地を、傷つける。

ここは、苦痛にゆがんだ土地。

ここは、ひかりが失われた場所。

どうして、ここを故郷ふるさとと呼べるだろうか。
どうして、ここを楽園らくえんと呼べるだろうか。

ここは、いのちの土地ではなく

償いは、死によって、痛みによって、もたらされる。

未来をいま、わたしたちは、試あされていて。

希望が、徐々に輝きを増すひかりならば

明日のひかりは、ここでふたたび輝くのだろうか。

故郷ふるさとよ。楽園らくえんよ。

思うに、希望とは、未来への、天空を渡るひかり。

ひとが歩けば、ひかりが満ちあふれて

故郷の、楽園の。

やがては、そこが地上の道となるのだろうか。

苦しみの、悲しみの、悦楽の、安息の。

そこが、地上のまぼろしの道となるのだろうか。

(「脱原発・自然エネルギー218人詩集」より)

「思うに、希望とは、
もともとの地上には、
もともとのものだとも
いえない、ないものだと
もいえない。それは地上
の道のようなものであ

る。もともと地上には、
道はない。歩く人が多く
なれば、それが道になる
のだ」
魯迅『故郷』の、この

一節を踏まえた詩篇。魯
迅の「道」は、高村光太
郎の『道程』の「道」と
は異なる。表現は似てい
ても、意味は正反対に近
ろつか。

ア シ タ ノ コ ト バ

